ふるさと再発見！ vol.11

ほうぼう わかやま

FREE

巻頭特集

渋さ艶めく黒竹

歴史・文化
散策
わかやまの偉人
I♥WAKAYAMA 私の和歌山

紀州三大窯のひとつ 南紀男山焼
文化と歴史漂う城下町 田辺街中探訪
航空界のパイオニア 山田猪三郎の夢
想い出の小鷹網

黒竹

渋さ艶めく

熊野古道の道中において難所のひとつといわれる鹿ヶ瀬峠（しがせどうげ）の麓にある日高町原谷（はらだに）地区。ここは全国でも数少ない「黒竹（くろちく）」の産地である。その生産量は全国シェアの約7割を占め、日本一を誇る。

黒竹は中国原産の淡竹（はちく）の一種だ。黒々とした棹（さお）（樹木で幹に当たる部分）が特徴で、その天然の色艶と渋い風合いが人々の目を惹きつけてやまない。小径で細いために用途は限られているものの、建築材・造園材・日用品などに幅広く利用され、全国に出荷されている。

明治初期にはすでにこの地域の山林に群生していたことが日高郡誌に記されており、地域の気候と土壌が黒竹に適していたことがわかる。昭和中期には、その質の高さから釣竿用としてフランスへ輸出もしていた。明治・大正・昭和という時代の変遷を経て、現在の地域産業にまで発展していったのだ。

素材として供給されることが多いため、県内でも黒竹が郷土の特産品であることを知らない人が少なくない。

今回は、原谷地区にある金﨑竹材店を訪ねて、知られざる特産品「黒竹」についてお話を伺った。

約30年にわたり黒竹の生産に携わっている金﨑昭仁さんは温厚そうな笑顔で詳しく教えてくれた。

黒竹の寿命は3年

地面から生えたばかりの4～5月にかけてのころは、まだ青竹のように緑色です。背丈は7月ごろまでに完全に成長します。夏を過ぎるころには節の部分から表皮が黒味を帯びはじめて、翌年の秋ごろまで約1年をかけて黒くなっていきます。2年目の秋から冬が伐採時期です。この時期を逃すと、次の秋には先のほうから枯れてきます。同じころに生えたものでも、場所や日当たりによって色合いが違います。急斜面で赤土のところが理想です。昔の人はそういう所を分かっていたんですね。

山崩れ防止がいつしか地域の産業に

うちは明治後半に祖父が創業しました。当時盛んであった除虫菊（じょちゅうぎく）の栽培をやめた跡地に黒竹を植えた人たちもいたと聞いています。竹は広範囲で根を張るので、他の木よりも土をつかむ力が強かったことから、山崩れを防ぐ効果があるそうです。以前はみかん畑だった竹林や、隣の土地から増殖してきた竹林もあります。

素材を見極める目 熟練の技が生みだす艶

黒竹は「艶が命」です。いかによい艶を出すかを一番注意します。ある程度乾燥させないと時間が経てば曇ってきますし、曲がりも戻ってしまいます。

30年近くやっていると竹の肉厚の違いが手の感覚で分かります。熱でやわらかくしないと矯正はできないですが、あぶり過ぎると肉厚が薄いものは割れてしまう。手でぐるぐると回転させながら、竹に熱が一定にあたるようにします。

火あぶりで燃えないのかと聞かれますが、その加減は職人それぞれの感覚なので口では伝えにくいですね。初めのころはよく焦がしました。炭になった部分は押さえるとすぐに折れるので不良品です。

細いものは電気炉で機械作業します。こちらは、同じ温度で同時に熱があたるのできれいな艶は出ますが、ローラーで次々と伸（の）して出てくるので、矯正の面では時間がかけられず雑になります。短くカットして使用されることが多いので曲がりは目立ちませんが、人の手だと感覚で分か

【取材協力】

金﨑（かなさき） 昭仁（あきひと） 氏

明治後半に創業の金﨑竹材店の３代目。
約 30 年にわたる熟練の加工技術により
黒竹の艶が生み出される。

【お問い合わせ】

有限会社 金﨑竹材店

和歌山県日高郡日高町原谷 1293
TEL0738-63-2101

黒竹の主な生産工程

出荷できる状態になるには、いくつもの作業工程がある。作業のほとんどが手作業で、熟練した職人技を要するのだ。

伐採 → 枝打ち → 選別（色合い・太さや部位） → カット → 目打ち（目取り） → 乾燥 → 火あぶり（油ぬき・伸し） → 梱包・出荷

伐採の最盛期は10月～11月。生えてから２年目のものを見分けて伐採する。
緑色は1年目、黒色は２年目、灰色になっているものは３年以上の枯れたもの。

太いものは、枝をはらう。
細いものは枝をはらわず商品にするものもある。

「一級品」…7割以上黒く色づいているもの。
「二級品」…一級品以下の色づきもの。決してB級品ということではない。

長尺ものなら一番細いもので三分〔さんぶ〕(約9mm)。四分〔よんぶ〕、五分〔ごぶ〕と約3mm単位で分ける。太いものは、一寸五分〔いっすんごぶ〕くらいまで、１本ごとに手の感覚で分ける。

出荷する長さにカットする。
太いものは基本的に2m規格。関東規格では一間〔いっけん〕(約1.82m) だが、関西規格の2mにしておけば全国的に対応が可能。

引っ掛かりをなくすため、枝の付け根の部分を切り取る。

天日干しで自然乾燥させて、できるだけ水分を飛ばす。

約900度の火気であぶる。表面に浮き出た油分を拭き取り、磨きをかけて艶を出す。
太いものは、すべて手作業。

万力〔まんりき〕で、竹の曲がりを矯正する。油ぬきと同時に行う。

部位や太さによって定量ずつ束ねて出荷。

- 長尺もの……2 mのものなら三分サイズで 300 本で1束、一寸五分サイズでは７本で１束など。
- 長穂〔ながほ〕……棹の細い物で、枝をはらわずに葉を取り除いたもの。1束は5貫（約 19kg)。
- 黒穂〔くろほ〕……枝ばかりを集めて、葉を取り除いたもの。１束は5貫（約 19kg)。
- その他……日用品の柄、植え込み用の根付き状態のものなど。

伸しでつかう万力という道具。太さに合わせて使い分ける。

熱で柔らかくして竹の曲がりをなおしてま～す。

乾燥と火あぶり（油ぬき・伸し）は、出荷までに3回程度繰り返されます。

中央が火あぶり直後の黒竹。艶がすごい！

注文が入ると和歌山から全国各地へ出荷されま～す。

奥の電気炉で熱せられローラーで伸される

る1本ごとの肉厚や節間の違いを機械は判断できません。折れや割れがでることが多いですね。出荷できない端材は、民芸品用に使用されます。

後継者不足と獣害問題の深刻化

原谷地区の竹林面積は、昭和60年（1985）ごろのピーク時で80haぐらいでした。需要が多かったため、竹やぶに肥料を与えて増殖させたりしたこともありました。しかし、それ以降は右肩下がり、現在では半分以下になっているのではないでしょうか。生産者さんの数も同じで、今は20軒ぐらいですね。高齢化もすすんでいます。後継者がいなかったり、獣害によって意欲をなくしたりして、やめてしまった生産者さんもいます。

いま深刻な問題は、シカ・イノシシ・サルによる食害です。一番被害が多いのはシカで、唾液は根っこまで枯らすと言われています。県の補助を受けて、高さ約2mの金属製ネットで竹やぶを囲っているところが多いです。サルの侵入は防げませんが、被害の多いシカ・イノシシの食害を防ぐことが先決なんです。

鹿ヶ瀬峠から麓へ下ると熊野古道沿いにも黒竹が生い茂る

阪神淡路大震災が需要の転換期

以前は庭園関係での需要が多かったんですが、阪神淡路大震災の後は日本瓦が敬遠され建物自体が洋風化してきたため、庭園資材が減りました。しかし、建築材のうち内装材の需要が増えてきたんです。洋風化がすすんでも日本人としてどこかに「和」の部分を求めるんですね。自然志向で黒竹の良さが見直されている動きもあり、現在では6～7割が内装関係に使用され、需要がかつてと逆転しました。

倉庫に貯蔵されている出荷待ちの黒竹

私たちを惹きつける黒竹の艶。その風合いは、ほとんどが手作業による熟練の技から生み出されていた。

全国的にも数少ない郷土の特産物は、獣害や後継者の育成などさまざまな問題を抱えている。しかし、黒竹を活用した地域振興の動きもあるそうだ。素材供給だけでなく、黒竹を使用した製品づくりの開発なども行っているという。

黒い竹が生い茂る竹やぶや、あちらこちらで見かけられるこの地域ならではの加工風景はいつまでも変わらずにいてほしいものだ。

一般の方でも、予約をすれば黒竹の民芸品づくりを体験できます。

一輪挿しや壁飾りなど、あなただけの作品をつくってみましょう。

【連絡先】
ふるさと産品販売所　黒竹の里ぴかいち
和歌山県日高郡日高町萩原 1400
TEL/FAX 0738-63-3528
予約受付：平日 9 ～ 15 時

南紀男山焼

近世紀州の三大窯と称され、偕楽園御庭焼・瑞芝焼と並び、藩の御用窯として当時紀州でも最大の規模を誇っていた南紀男山焼。庶民に愛される日用雑器を多く作りながらも、芸術性豊かな作品を残した。その歴史を紐解く。

男山焼窯のはじまり

寛政9年（1797）井関村（現：広川町井関）に生まれた崎山利兵衛は、若い頃に京阪に出て作陶の修行をし、27才のころ和歌山に帰り和歌山城下に近い高松に陶器窯を開いたと伝えられている。この窯で焼かれた「南紀高松」銘をもつ作品や利兵衛の銘の作品も現存する他、日用雑器類も焼かれていた。

このころ紀州藩は10代藩主徳川治宝のもと商業を発展させ、特産品の開発を行う殖産興業政策をすすめていた。窯を大きくしたいと考えていた利兵衛は文政10年（1827）官許と藩の全面援助を受け、紀州藩の御用窯として故郷に男山窯を開いた。ここに窯を築いた大きな理由は、陶石などの原材料や燃料となる赤松が豊富にあったこと、男山の緩やかな斜面とすぐ近くに池があるという立地が登り窯の設置に適しており、水運に恵まれていたからだといわれる。

陶石
陶磁器の原材料となる陶石は、広川町山本の庚申山〔こうしんやま〕から採取したといわれる。

日用雑器としての男山焼

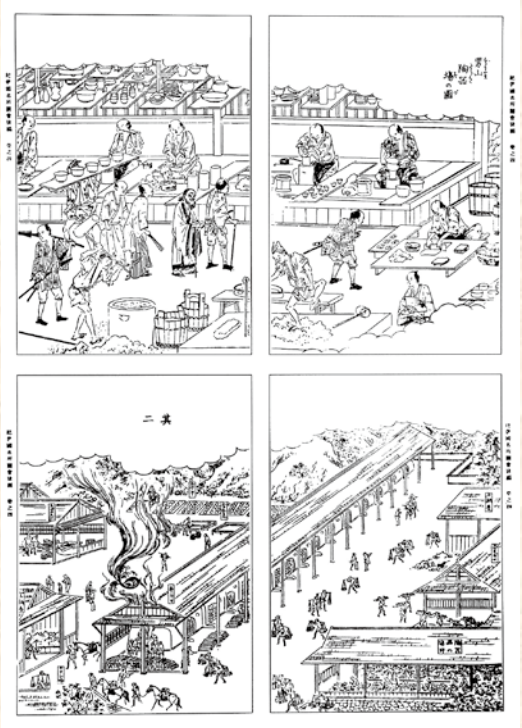
男山焼は当時の全国的な陶磁器需要の高まりに応えるため、藩の援助のもと紀州でも最大規模の窯を誇っていた。嘉永4年（1851）に編纂された紀伊国名所図会には、男山焼の窯場について「広八幡宮の境内に隣りて、東西百間、南北五十間の地を陶器場とする」とあり、板葺の覆屋をかけた14房の登り窯とその周囲に素焼窯、土こし場、土納屋、細工場など各工程を

トチ
皿などを焼成する際、間にはさみ込むことでお互いがくっつかないように重ね焼きする道具。

染付三段重
染付の三段重ねの重箱。格段の胴の下部に鋸歯文〔きょしもん〕を、上部に雷文〔らいもん〕をめぐらしている。

分業して行っていた様子が伺える。また、窯場跡からヌケ（窯のなかで作品を乗せて安定させる道具）やトチ（右頁下の写真参照）といった窯具が見つかっており、一度に大量の製品を作っていたことがわかる。

男山焼の大部分は白い地肌に藍色の模様を焼き付けた染付で、無名の日用雑器が多い。出来上がった製品は有田市の宮崎（箕島）陶器商人らによって全国に販売された。一方、技術的に優秀な在銘の作品も作られており、一般的には「南紀男山」の染付銘が記されている。陶工のなかでも地元出身の土屋政吉（号：光川亭仙馬）は美術工芸品として価値の高い作品を数多く残し、いまでは「男山の政吉か、政吉の男山か」といわれ、高い評価を受けている。



紀伊国名所図会　男山焼窯の全景と、各工程の作業の様子。

窯の運営から閉窯へ

藩からの窯場の維持、管理や経営を一任された利兵衛は責任も重く、苦労もしたが彼の才覚で運営が続いた。その後、藩からも功績が認められ、名字帯刀が許される。しかし、嘉永5年（1852）それまで男山焼を庇護した徳川治宝が他界。それに藩の財政難も加わり、男山焼に対する藩の姿勢も消極的になった。安政3年（1856）には、男山窯場の藩有施設は利兵衛に払い下げられ、御用窯ではなく利兵衛個人の経営になった。ところが、明治2年（1869）紀州藩は維新後の藩政の大改革を行い、特に産業振興のため開物局を設置した。男山窯や瑞芝窯はその管理下におかれ、再び半官半民の窯となった。しかし間もなく開物局が廃止される。

三彩狛犬　現存する男山焼の中で最大の作品。
現在は広八幡宮に保存されている。和歌山県指定文化財。

再び利兵衛の個人経営に戻るが、明治8年（1875）に利兵衛が亡くなり、利兵衛の妻コノが、隣の南金屋村（現・広川町南金屋）の池永勘兵衛の二男・宇之助を養子として二代目利兵衛を継がせ再興を図る。

明治10年（1877）に第一回内国勧業博覧会が東京で開催され、和歌山県の代表物産として男山焼の花瓶を出品し、主催の内務卿大久保利通より褒状を受ける。しかし、官の援助も絶え販路も減少していた男山窯の経営は厳しく、この成果を最後に明治11年（1878）、50年余り続いた男山窯は閉じられた。

閉窯にあたり、世話になった関係者に七福神を焼いて配ったといわれる。

男山焼会館
和歌山県有田郡広川町大字上中野 88 番地の 2
お問い合せ　TEL 0737-64-0881
開館時間／9：00 ～ 17：00
休館日／毎週月・火曜日と年末年始（12月29日～1月4日）※祝日は開館
平成 4 年、かつての男山焼窯跡に開館した男山焼会館は、当時の作品の展示をするとともに、陶芸教室などを通じて、男山焼の伝承に努めている。

文化と歴史漂う城下町
田辺街中探訪

⑪武蔵坊弁慶像
文治５年（1189）平安時代末期の僧兵、源義経の郎党。京都の五条橋で義経と出会い、最後まで彼に仕えたという。詳細は不明だが、熊野別当湛増の子で、田辺生まれであることは様々なことから有力視されている。

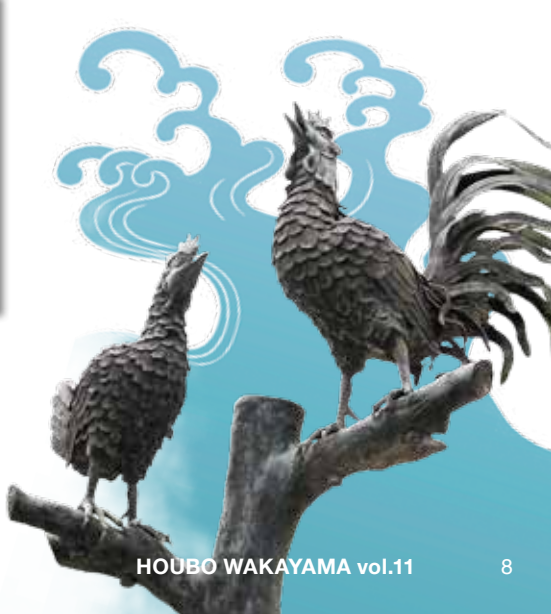
豪傑「武蔵坊弁慶」の生地といわれ、博物・民俗学者「南方熊楠」が晩年を過ごし、「風光明媚」と絶賛した「田辺」。かつて、城下町として栄えた文化と歴史の名残をゆっくりと味わう。

まずは紀伊田辺駅から、懐メロが流れる正面駅前商店街のアーケードを歩く。次の信号の交差点を右折して、少し歩くと「**蟻通神社**」がある。その先の大きな「**道分け石**」は、かつての熊野古道の大辺路・中辺路分岐点を示す標識だった。突き当りを左折すると右の陶器屋さんの店先に「**本町道標**」がある。そのまま進み、通称「**かまぼこ通り**」（福路町）、片町通りを渡って「**八坂神社**」へ。境内には弁慶腰掛石がある。再び片町通りに戻り、会津橋のたもとの交差点を左折すると、右側に戎神社、さらに進むと「**田辺城水門跡**」がある。今は錦水公園として整備されているが、ここには錦水城とも呼ばれた田辺城があった。さらに進んで左折、扇ヶ浜方面へと足を運ぶ。市役所前の駐車場一角には「**弁慶産湯の井戸**」と「**弁慶松**」があり、道を渡ると「**扇ヶ浜（カッパーク）**」が見える。少し戻って裁判所前のT字路を右折すると、南方熊楠が多くの研究成果を生んだ場所「**南方熊楠旧邸・顕彰館**」がある。南方邸を過ぎた左側には、瓦と土が交互に重ねられた趣深い塀が連なる。突き当りを右折すると、その先には「**闘雞神社**」が見えてくる。その名は弁慶の父、熊野別当湛増が源平合戦の折、紅白の鶏を闘わせてどちらの味方をするか決めたことに由来するという。最後に紀伊田辺駅前の「**弁慶像**」を見上げ終着。

碁盤のように整備された城下町は、自由に順路を変えて探訪を楽しめる。

⑨南方熊楠顕彰館
平成18年5月開館、熊楠が遺した蔵書・資料を恒久的に保存するとともに広く公開し、熊楠に関する研究を推進している。また、同敷地内には、熊楠の生活と研究の拠点であった南方邸が、当時の様子を伝えている。

⑩闘雞神社
通称「権現さん」と呼ばれ、御祭神の中には、熊野三山も勧請されている。明治の神仏分離の際に、「闘鶏神社」が正式名称となった。また、境内の一角には、鶏を闘わせた様子を再現した湛増と弁慶の像があり、勝負の神様としても御利益があるといわれている。



④かまぼこ通り
田辺名物「南蛮焼〔なんばやき〕・牛蒡巻〔ごぼうまき〕」などを売るかまぼこ店が数件並んでいることから名付けられた。

③本町道標
北新町の道分け石ほど大きくないが、熊野詣での際、道に迷わないよう街中のあちこちに建てられ、当時はなくてはならないものだった。

②道分け石
かつての往時の賑わいを今に伝える貴重な史跡。高さ 218cm、幅厚 30cm あり、安政 4 年に再建されたもの。

①蟻通神社
境内には「霊樟」とされる大きなクスノキがあり、安政元年の冬の大火の時、水を吹いて町を守ったという伝説がある。

⑤八坂神社
地元の人に大切にされている小さな神社。境内の腰掛石は、弁慶が少年時代に、この石に座ったといわれている。

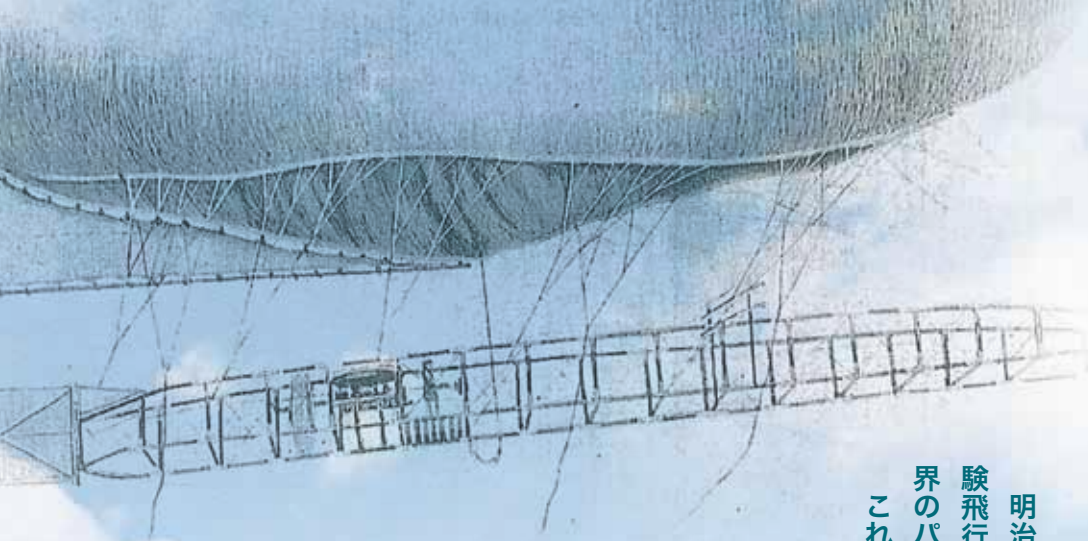
足をのばせば

天神崎
ナショナルトラスト運動の先駆けとして一躍有名となった。日和山を中心とする緑豊かな丘陵部と、干潮時に顔を出す平らな岩礁で形成されている。陸と海の動植物が一体となった生態系をつくっており、豊かな自然が残されているのが特徴（ナショナルトラスト運動とはみんなの大事な預かり物という意味である）。

⑥田辺城水門跡
田辺城は関ヶ原の合戦後、浅野左衛門佐氏重〔あさのさえもんのすけうじしげ〕によって、慶長 11 年（1606）に築城された。しかし、明治 3 年（1870）に廃城となり、遺構の多くは姿を消した。現在は水門の石垣だけが残っている。

⑦弁慶産湯の井戸・弁慶松
弁慶の産湯の水を汲んだと伝えられている。昭和 35 年まで田辺第一小学校にあったが、平成元年、ここに復元された。「弁慶松」は弁慶の死を悼み植えられたもので、植え継がれて現在 6 代目になる。

⑧扇ヶ浜（カッパーク）
その名のとおり扇の形をしていることから扇ヶ浜と名付けられた。夏の海水浴期間を中心に、さまざまなイベントが催される。その中には熊野水軍出陣の地の碑や、野口雨情の歌碑、合気道の創始者「植芝盛平〔うえしばもりへい〕」の像などがある。



国産飛行船の初飛行に成功

没後100年

わかやまの偉人

航空界のパイオニア 山田猪三郎の夢

明治43年（1910）、国産飛行船「山田式1号飛行船」の試験飛行が東京で行われた。手がけたのは、紀州藩出身で、航空界のパイオニアとして知られる山田猪三郎。これが、国産飛行船が初めて飛行に成功した瞬間だった。

時代に役立つものづくりを

山田猪三郎は文久3年（1863）、紀州藩士の家に生まれた。時代は明治維新に突き進むころで、猪三郎は新しい世に役立つものを作りたいと夢みる少年時代を過ごした。

大阪でゴムの加工法を学んだ猪三郎は、29歳で東京に進出し、救難浮き具製造所を開設する。現在のライフジャケットに通じる水難救命具を開発すると、続いて開発に取り組んだのは、ゴム加工の技術を生かした気球だった。

夢の初フライトへ

猪三郎の空への思いはとどまることを知らず、やがて飛行船の開発に着手し、国産飛行船「山田式1号飛行船」が生まれる。長さ30mの巨大な気球にゴンドラをつるし、エンジン付きプロペラを乗せたもので、当時、人間が運転し、飛行に成功した例は国内ではまだなかった。

初フライトは、明治43年9月8日。東京・大崎から駒場までを飛行した。翌年には2号機が完成し、大崎から神宮外苑まで。続く3号機は東京上空約20kmの周遊に成功した。人間が運転する巨大な乗り物が空を飛ぶ光景は明治の人々を大いに驚かせ、大空への夢を抱かせたようだ。

3号機の飛行から2年後、猪三郎は49歳の若さで亡くなる。しかし、その功績は「日本航空界の先覚者」と呼ぶにふさわしく、現在も多くの航空ファンから尊敬を集めている。

山田猪三郎年表

1863年（文久3）
12月1日、和歌山城下新堀七軒丁に生まれる

（1868年、明治改元）

（1886年、和歌山県串本沖でノルマントン号事件、日本人乗客は25人全員が死亡した。）

1892年（明治25）
東京で救難浮き具製造所開設

（1894年、日清戦争）

1900年（明治33）
凧式係留気球完成

（1904年、日露戦争）

1910年（明治43）
9月8日、山田式1号機、大崎～駒場間往復

1911年（明治44）
2月8日、山田式2号機、飛行実験で神宮外苑まで飛行
9月17日、山田式3号機、東京一周、20km飛行

（1912年　明治天皇崩御）

1913年（大正2）
4月8日死去、満49歳

1929年（昭和4）
新和歌浦の高津子山に顕彰碑建立

「子どもたちの誇りに」

山田猪三郎顕彰会
世話人　小林（こばやし）　護（まもる）さんに聞く

右頁上・右：山田式飛行船１号機
上：山田式飛行船２号機
左：山田式飛行船３号機

和歌山市新和歌浦の高津子山には、猪三郎の業績をたたえる顕彰碑が建っている。猪三郎の死後建てられたもので、現在は「山田猪三郎顕彰会」が保存に力を尽くしている。顕彰会の世話人を務める小林護さんにとって、人々に最も知ってもらいたい猪三郎の「偉業」は、猪三郎が開発に取り組むことになったきっかけだという。

―猪三郎がものづくりをスタートしたのは、「人命救助」への思いからでした。きっかけは明治19年（1886）のノルマントン号事件です。事件に心を痛めた猪三郎は、そこから携帯用救命具の開発を目指したのです。

救命具の開発を皮切りに、ついには国産飛行船での初飛行を果たした猪三郎。しかし、地元和歌山では、多くの人にその偉業を知られているとはまだ言えない。

山田猪三郎顕彰碑前に
たたずむ小林護さん

―私も顕彰碑について調べるまで、猪三郎という人のことは知りませんでした。私と同じように興味を持ち、猪三郎のことを尊敬する人が増えるとうれしいです。

山田猪三郎は平成25年（2013）、没後100年を迎え、記念事業として絵本『山田猪三郎物語』が出版された。

―県内の小・中・高校と図書館などに配布されています。本を読んだ子どもたちには、猪三郎を誇りに思ってもらいたい。そして次の世代、また次の世代へと語り継いでほしいですね。

「山田猪三郎物語―大空へかけた夢―」
平成 25 年（2013）山田猪三郎顕彰会

曾祖父のポリシーを継いで

株式会社気球製作所
（東京都大田区）
代表取締役　豊間（とよま）　清（きよし）さん

私が初めて和歌山を訪れたのは平成21年（2009）。それまでも曾祖父の碑があることは知っていましたが、足を踏み入れる機会はありませんでした。訪れた印象は、「初めてという感じがしない」ということ。それは何より和歌山の皆さんのあたたかい人柄のおかげです。それに加えて「曾祖父と同じ風景を見ている」という感慨もあったからだと思います。

猪三郎のひ孫ということで、和歌山の方から質問を頂くことが多いのですが、私の父が生まれたときには曾祖父はすでに亡くなっており、直接知っているわけではありません。取材を頂くことで、逆に私のほうが勉強させてもらっています。

家族に伝わっているエピソードでいうと、曾祖父は明治の時代からシェフを雇い、ナイフとフォークで食べるという食事スタイルをとっていたそうです。そういう新しいもの好きの感覚が、気球や飛行船を開発する原動力となったのかもしれません。

今回のように取り上げて頂き、曾祖父のことを調べれば調べるほど、その豪快さやチャレンジ精神に対する尊敬が深まっています。曾祖父の「世の中の役に立つものを作る」というポリシーを引き継ぎ、気球製作の道で社会に貢献していきたいと思っています。

㈱気球製作所ではゴム気球等の
製作に取り組んでいる

I ♥ WAKAYAMA 私の和歌山

「想い出の小鷹網」

by オカチャン

私は、家の下に熊野川が流れる熊野川町出身です。子供のころの夏休みは、熊野川で鮎やえび捕りをして一日過ごしていました。

小鷹網と呼ばれる網を投げて魚を取るのです。

父親の真似をして網を投げても上手く開かず、すぐに退散。いつも坊主でした。

父親はリタイア後、夏になると鮎捕りを楽しんでいました。

私が帰省したときは、夕暮れまで二人で鮎捕りをしていました。

先日、知り合いのカメラマンの誘いで、小鷹網の西屋流伝承者・小西誓也さんの取材に同行させてもらう機会がありました。

小鷹網は300年の歴史を誇る紀ノ川の紀州徳川家お抱え鮎師の道具だったことは、「釣りキチ三平」や情報誌等で知っていましたし、道具も幼いころから見慣れていたので、私にとって目新しいことはありませんでした。

ただ、小西さんが鮎のことを、私の故郷と同じ「あい」という言葉で呼んだときは、懐かしさが込み上げてきました。

私にとって小鷹網は、歴史を誇る伝統漁具というより、父親と夕暮れまで二人で鮎捕りをした、想い出深い川遊びの道具です。

そんな小鷹網のように、あまり知られていない、故郷の身近な歴史や文化を発信し続けられる「ほうぼわかやま」でありたいと、改めて感じました。

西屋流 小鷹網

西屋流小鷹網（あかねやりゅうこだかあみ）

写真提供：勝田　憲央

編集後記

「ほうぼ・わかやま」第11号をお届け致します。7月と12月の年2回発行している弊誌ですが、制作に携わる数カ月だけでなく、年間を通して定期的に編集会議を持ち、企画を練り上げていきましょうという方向になりました。すぐには効果が表れないかもしれませんが、徐々に内容に深みが増してくると思います。引き続き温かく見守ってやって下さいませ。

今回も「読者のみなさんに喜ばれる企画とは？」「読みやすい記事とは？」「見やすい誌面とは？」…を自分たちに問いかけながら取り組んできました。散策のページも、候補地が二転三転しました。それ以外の誌面も、記事のダメ出し、レイアウトの変更・調整…。そんな誌面作りに携わる裏方のみなさんの悲喜交々も含めて、読者のみなさまにお伝えできるような、もっと身近な地元のフリーペーパーをこれからも目指してまいりますので、どうぞよろしくお願い致します。

ご意見、ご質問がございましたら、何なりとお聞かせ下さい。お待ち致しております。

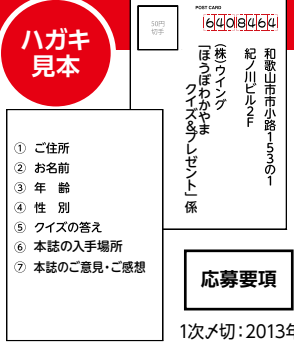
第11号編集長　岡　京子

クイズとアンケートで当たる！

クイズにお答え頂いた方の中から抽選で「大空へかけた夢 山田猪三郎物語」の絵本

合計10名様にプレゼント!!

ハガキ見本



問題 明治43年（1910）に初飛行を成功させた乗り物は何でしょう？

ヒント 本号のどこかに答えが載っています。

①飛行船　②ヘリコプター　③ロケット

Vol.10の答えは『③2700m』でした。

応募要項 官製ハガキまたはメールにて ①ご住所 ②お名前 ③年齢 ④性別 ⑤クイズの答え ⑥本誌の入手場所 ⑦本誌へのご意見・ご感想を必ずご記入の上、下記へふるってご応募ください。

1次〆切：2013年9月末日（当選人数／5名様）2次〆切：2013年10月末日（当選人数／5名様）

■ハガキ ： 〒640-8464 和歌山市市小路153-1 紀の川ビル2F ㈱ウイング 「ほうぼ・クイズ&プレゼント係」
■メール ： houbo@w-i-n-g.jp ※応募くださいました個人情報は、プレゼントの発送及び弊社からのお知らせ以外には使用しません。

株式会社ウイング
印刷から、新しい価値の創造を。

株式会社ウイング／印刷物の企画・デザイン・製造を得意分野とし、販促支援などの新しいサービスに取り組んでいます。印刷だけでなく様々なメディアを駆使し効果を追求している会社です。
［沿革］創業1972年。設立1981年。2005年に中央印刷㈱から㈱ウイングに社名変更。従業員52名。

「ほうぼ・わかやま」発行について　和歌山の歴史・文化を掘り起こし郷土愛を育む一助になればと、弊社が自費で年2回発行している情報誌です。また、この活動を通して、郷土と社内の活性化の両立を図ることを目的としています。

詳しくはウェブで検索→ http://w-i-n-g.jp　ウイング 和歌山　検索

ほうぼわかやまのバックナンバーは弊社ホームページからもダウンロードできます。
お問い合わせ先 0120-136-700

2013年8月1日　発行人／松田好司　編集人／岡京子　発行／株式会社ウイング
本社　〒640-8411 和歌山県和歌山市楠見172　TEL.073-453-5700／FAX.073-453-5522
E-mail：mail@w-i-n-g.jp　http://w-i-n-g.jp